

イチゴからガーベラ栽培へ

約2000坪にわたるハウスの中で、常時3〜4万ポットのガーベラを栽培している津島市のなかの園芸。「9月頃から翌年の入梅の時期まで、毎週、色とりどりのガーベラの出荷に追われています」と語るのは代表の中野真宏さん。しかしかつてはイチゴ農家だったという。

津島市は昭和20年代後半からイチゴ栽培を始め、なかの園芸がある下新田町内にも60名ほどのイチゴ生産者がいる県下でも有数のイチゴ産地だったのだ。しかし、父が行っていたイチゴ栽培から、ガーベラ栽培に切り替えたのは真宏さんだった。

もともと農家を継ぐつもりで安城農林高校へ進学した真宏さんは、その後、愛知県追進宮農大(現・愛知県立農業大学校)へ進学。そこで専攻したのが「花」だった。その理由を「綺麗で可愛いから」と答える真宏さん。卒業後は愛知県農業試験場で育種の仕事に携わる経験も加わったことから、花栽培を始めたという希望を持ち続けていた。そんなとき、真宏さんの妹が花農家へ嫁いだことをきっかけに、ガーベラ栽培を学べることに。そしてなかの園芸に戻った真宏さんは、ガーベラ栽培を始めたのだ。

夏場を除き通年出荷

なかの園芸で栽培しているガーベラはガーデニング素材としてのポット苗やインテリア小物として楽しめるオリジナルポット付のミニガーベラ。なかの園芸のハウスには出荷を待つガーベラが色とりどりに咲き誇っている。

「何種類のガーベラを作っているんですか？」という編集部の方に「さあ、どのくらいなんだろう？」と驚きの返答をする真宏さん。というのも、ここでは真宏さん自身がつくり出したオリジナル品種を多数栽培しているからだ。

真宏さんがガーベラ栽培を始めた頃は、ほとんどが赤・白・黄色・オレンジ・ピンクの5色だった。育種の経験がある真宏さんは、たくさんのき

ラが中心。暑さが厳しい6月中旬から8月下旬を除き出荷が続くため、9月から6月までは毎週のように種をまく。その後発育状況に応じて植え替えを経て、種まきから約130日後になると順次出荷となる。その間、真宏さんは必要な水や養分を吸収し、元気な姿に育つように、根を丈夫にするための管理を最も徹底している。10年以上の経験を活かし、土は自家製ブレンドで、バランスの良い養分と排水性の良さを実現。肥料も根にストレスをかけないよう、ゆっくりじっくり吸わせる工夫をし、病害虫の被害も未然に防ぐため、絶えず状態のチェックをする。こうして手塩にかけて育てられたガーベラは年間10万から12万鉢を出荷。その7割は関東地方、2割が関西、1割が中部地方に出荷されている。この地方が一番少ないのは意外ではあるが、地元の方が直接買いに来られた

れいな色の花を咲かせたいと自ら交配を繰り返し、オリジナル品種の開発に取り組んだのだ。

「交配の作業自体はそんなに難しいわけではない、おしべから花粉を取り、めしべにつける作業だけ」と言う真宏さんだが、受粉後に種ができるのは約40日後。その種が咲かせる花を見ることができるのは1年後となる。こうして咲いた花の色は何通りにもなる。例えば赤色の花に白い花の花粉を合わせると、すべてが同じ色の花が出るわけではなく、ピンク一色だったり、赤い花びらの淵に白が入ったり、またはその逆だったり。真宏さんは「これだ！」と人気が出るような色合いの花を増やしながら確立した品種へと作り出していくのだ。しかし、そこまで必要とする年月は8〜10年。そのときに世間ではどの色が主流になっているのかを予測

巻頭特集 オリジナル品種の美しいガーベラを栽培

なかの園芸

まっすぐに伸びた花茎から存在感ある一輪の花を咲かすガーベラ。その可憐な姿に魅了され、オリジナル品種の開発に取り組み、様々な種類のガーベラを栽培しているなかの園芸を紹介しよう。

info

なかの園芸 津島市新田町2-54

TEL 0567-24-7598
営業時間 9:00〜17:00
定休日 日曜日

代表の中野真宏さん

何百種類というオリジナル品種のガーベラを、いずれは世界各国へ

栽培過程

① 毎週のように行われる種まき

② 種まき後2週間くらいで発芽

③ 種まき後2か月。ポットへ定植

④ 種まき後約130日。冬は花が咲いたら、春から初夏にかけてはつぼみの状態で出荷

(上) 交配の作業。梵天で花粉を採取し、めしべへ受粉させる
(下) 受粉後できたガーベラの種

真宏さんに聞いた

ガーベラの選び方と管理法

ガーベラ鉢の選び方

- 花の軸が細いものは弱いので、できるだけ太いものを。
- 葉を少し触り厚みを確認し、少しゴワゴワするものを選ぶ！

置き場所

- GW以降なら屋外でOKだが、冬の寒い時期は室内に。
- 太陽を好むので、日当たりの良い場所に置こう！

水やり

- 葉がしおれ始めたときが水やりのタイミング！
- 毎日少しずつ水をやるより、土が乾ききったタイミングでたっぷり水やりするほうが長持ちする。
- 不安な方は底面吸水にするのがオススメ。
- 吸水性の良い物を鉢の底に差し、受け皿に水を入れると吸い上げてくれる。